

名古屋 文化 情報

2021
3・4
March / April

No. 397
NAGOYA
Cultural
Information

特集 / 2020 1年をふりかえって
令和2年度 名古屋市芸術賞
文化でナゴヤを応援! きみのあした♪プロジェクト



2021

3・4

March / April

Contents

名古屋市市民文芸祭 受賞作品…………… 2
 2020 1年をふりかえって…………… 3
 令和2年度 名古屋市芸術賞…………… 9
 文化でナゴヤを応援! きみのあした♪プロジェクト…………… 10
 おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 瀧津清仁 (指揮者)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座 制作部長)

表紙

写真作品

Cosmic Birth

(2018年/5m21cmx1m62cm/
 キャンバスにアクリル・ジェッソ・オイルパー) 於:のこぎり二(一宮・愛知)

ゴッホの絵画は、言語、宗教、国境、時代を越えて鑑賞者を感動に導く。彼の表現が、人間の普遍的な「魂」の領域まで達しているからだろう。自分も、少しでも魂の領域に達した表現ができればと思っている。



加藤 K (かとう K)

略歴

- 1968年 名古屋生まれ
- 1993年 武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
- 1995年 K.ArtMarket設立
- 2010年 K.Art Studio設立
- 2018年~ 長岡造形大学非常勤講師

ホームページ <https://k-artmarket.com>
 インスタグラム [artworldk](https://www.instagram.com/artworldk)

これまで隔月で発行してまいりました「なごや文化情報」ですが、次号(398号)より、季刊(年4回)とさせていただきます。引き続き、当地域の文化芸術の情報発信に努めてまいりますので、今後ともご愛読くださいますようお願い申し上げます。

「2019年 名古屋市市民文芸祭」(第七十回名古屋短詩型文学祭) 小・中学生の部

詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆名古屋市教育委員会賞◆

「君へ」
 名古屋市立駒方中学校3年 矢藤陽菜乃

僕は うさぎ
 僕は いろんな人から愛される
 それが一番 うれしいんだ
 ほら うれしくって 笑っているでしょ！
 君は 愛してもらえない？
 愛してもらえないと思ってる人！
 絶対だれかが 君を見ている
 そっと力をぬいてごらん
 そのままの君で いいんだよ

僕は きつね
 君から見た僕って どんなイメージ？
 「いじわるな動物」っていうイメージが
 多いと思う
 絵本の中で 時々僕はいじわるな動物だから
 でもね 本当はちがうんだよ
 ねえ 気づいてよ！
 僕のいい所
 イメージだけで 決めつけないで

僕は そう
 僕って 体が大きいでしょ？
 だから 全てが大きいって思われる
 でも 心はとーっても小さいんだ
 とてもきずつきやすいんだ
 君は きずつきやすい？
 いろんな人がいると思う
 やさしくしていると
 やさしくしてもらえるよ
 だから君は みんなをきずつけないよう
 やさしくね

僕は ねこ
 僕は とーつても幸せ者なんだ
 僕を大切にしてくれる
 ♪家族ができたから
 君は家族を大切にできてる？
 一期一会
 奇跡的に出会った 大切な家族
 そして友達
 出合いを大切にしよう

僕は りす
 僕は 昨日の自分に勝ちたい
 でも 今日負けてしまった
 そんな時もあるよね
 その負けを どう生かすか
 それが問題だと僕は思うんだ
 そして 負けを知った君は
 もっと強くなる

2020

1年をふりかえって

洋舞 ▶ 長谷 義隆(中日新聞文化芸能部編集委員)

舞踊界は新型コロナウイルスの感染拡大により、3月以降、公演の中止や延期を余儀なくされ、舞台関係者を含めて大きな打撃を受けた。

年初に大きな収穫があった。道ならぬ愛に殉じた二組の男女の悲劇を描いたBALLET NEXTの創作バレエ「落葉と薔薇」の初演である(1月19日)。芸術監督市川透は、大勢の登場人物が複雑に絡み合う物語を、映画さながらカット割りの手法で場面を積み上げ、正味二時間半の長編悲劇に仕上げた。



BALLET NEXT「落葉と薔薇」の梶田真嗣(右)と竹之内彩恵
1月19日 名古屋市芸術創造センター

2月末、ウイルスの感染拡大により、イベントの自粛要請があり、3月以降の公演は中止。さらに4月に政府による緊急事態宣言が出されると、スタジオも休業。レッスンの一部はオンラインへと移行され、先の見えない状態が続いた。レッスン中断が尾を引き、夏の発表会ができなくなり、玉突きで秋の定期公演も中止となった。

コロナ下であっても、自粛期間中はオンラインでレッスンを続け、緊急事態宣言の解除後は少人数に分かれてリハーサルを重ねるという方策もあったはずだが。コロナをやり過ごすのが、賢明な判断か、危機対応能力が足りないのか。悩ましいところだ。

一方で、コロナ下でも表現をやめない一群がいた。スペイン舞踊家の加藤おりはは“三密”を避け、人気のない野外に表現の場を求めて3月下旬から2カ月間、名古屋市内と近郊各所にて撮影ロケを敢行。映像作品「沈黙の春2020～加藤おりは野外ダンスアンソロジー～」として動画サイトに投稿し、表現者魂を発露した。さらに、名古屋の野外コンサート発祥の地である鶴舞公園奏楽堂に着目し、無料公演「月夜の

ダンスフェスティバル 2020 in 鶴舞公園」(10月31日)を挙行し、ゲストの現代舞踊の倉知可英、フラメンコの磯村崇史らと熱演した。

バレエ団では、川口節子バレエ団の活動が目覚ましかった。春の舞台こそ中止したが、主宰する川口は「芸術は不滅。どのような状況下に置かれても芸術発信していかなければ」と定期公演を開催(9月12、13日)。創作バレエ「サウンド・オブ・ミュージック」を上演し、さらに隔年の創作公演「舞浪漫2020」(12月5、6日)も開き、新旧七作を一挙に上演した。ゆかりバレエも創立三十周年公演を開いた(10月4日)。

全幕古典バレエは三団体がコロナ下で上演した。岡田純奈バレエ団は演目を急きょ差し替え、「ジゼル」を再演(10月10日)。小川典子率いる「NORIKO BALLET STUDIO」は「眠れる森の美女」全三幕を敢行した(10月24、25日)。グランドバレエ中最も豪華な大作を、発足十周年のスタジオが成し遂げた。小川のリーダーシップと情熱の賜物である。越智インターナショナルバレエは師走恒例の「くるみ割り人形」(12月26日)に注力。師走の風物詩の灯火を守った。

ジャズダンスの三代舞踊団が創設三十周年を記念し、第三十回クリスマス定期公演を敢行(12月13日)。「忍者～服部半蔵」で、使命に殉じる者たちの精神美を表現した。



三代舞踊団「忍者～服部半蔵」 12月13日 名古屋市青少年文化センター
撮影 スタッフ・テス根本浩太郎

愛知が生んだ名物男が物故した。チャイコフスキー記念豊田バレエ学校校長でバレエの国際交流に尽力した諏訪等氏(2月27日)。日本人ダンサーの国際舞台進出の草分けで、バレエ創作に手腕を振るった深川秀夫氏(9月2日)。バレエ界にとって大きな損失となった。

演劇 ▶ 小島 祐未子(編集者・ライター)

2月上旬、長久手市文化の家では日本劇作家協会東海支部の企画による「劇王2020」が開催された。短編戯曲のコン

ペティション「劇王」は、当地の才能を見渡せる一種の演劇見本市。2017年のアジア大会を挟み、通常コンペとしては

2013年以来の復活となった。

新人も増えたことから当初の意図に立ち返り、主に支部員の発表の場となるように構成。初めて触れる作家もいて収穫は多かった。そんな中、次世代エースの長谷川彩が『天国と地獄』で、斜田章大が『残像』で決勝巴戟に進出、実力を見せつける。『天国と地獄』はスピード感のある会話の応酬で爆笑を巻き起こし、『残像』は映像・言葉・身体が絡み、不気味な空気を生んだ。ところが、第12代劇王の座を奪ったのは非支部員の関戸哲也だ。空宙空地の劇作家・演出家・俳優である関戸は、外部枠のひとつである北海道・教文短編演劇祭2019の覇者となり、奇しくも凱旋の如く地元イベントに参戦することとなった。

関戸の出品作『死ぬ時に思い出さない今日という一日』は、屋上で出会った男女が遠くのビルに自殺しような人を発見したことから始まる二人芝居。二人は対照的な態度をとりコミカルな展開となるが、仕事や会社、生と死を巡り、徐々にそれぞれの価値観が浮かび上がってくる。クールな女とエモーショナルな男。二人はともに、今ある環境で必死に生きているだけ。そんな両者どちらの営みも、肯定も否定もせず、笑い飛ばしながら慈しむ関戸の視線がいい。生温かい感触。人生のリアルとは、そんなものかもしれない。



劇王2020を制した関戸哲也の作品『死ぬ時に思い出さない今日という一日』

9月には劇団天白月夜がホームグラウンドの天白文化小劇場で『相思～或る DEATH DANCE』を公演。この新作は、少年王者館の天野天街を中心に迎えて発表された。台本は劇団員の橋本恒司の原案をもとに、劇団そらのゆめの川村ミチルが執筆。それをベースに天野が演出している。ある通

夜の様子を描いた舞台は、演劇ともダンスともショーともつかぬ賑やかさ。近年の天野作品とは違った男臭さを感じさせる面もあり、最後まで興味深く観た。

一度目の緊急事態宣言解除後は、劇場にも動きがあった。太白区のナビプロフトは7月、仮面を活かした三人芝居『ハハチチ』やシンポジウムを含む複合イベントを敢行。中でも、美術と舞踊のライブパフォーマンス『すずめ、うれしめ』には舞台芸術本来の祈りの精神がうかがえた。大劇場では御園座が8月に再開。特に錦秋御園座歌舞伎が強く印象に残る。初日を拝見すると、幕が下りても拍手が止まない。通常10月は顔見世興行だが、この時はコロナ禍のせいもあってか、小規模な座組。それを寂しく思った常連客も少なくないはずなのに、そんな感傷すら吹き飛ばすほど熱い拍手が送られたのだ。名古屋の観客は感情を露わにしないといわれがちだが、人々がどれほど舞台を待ち望んでいたのか知る瞬間となった。



ナビプロフトで公演された、公開図画工作『すずめ、うれしめ』

最後に小劇場について少し付記しておきたい。前述のナビプロフトに限らず、伏見のG/PIT、円頓寺 Les Piliers（以下「レピリエ」）も再開。G/PITでは10月、名古屋市民芸術祭2019特別賞を受賞した刈馬演劇設計社の『異邦人の庭』が新キャストで再演され、レピリエでは11月に太宰治の『燈籠』を構成・演出した舞台が発表された。いずれも貸し館としては厳しい状況のはずだが、自主事業で存在感を示すことはできる。ナビプロフトには小熊ヒデジ、G/PITには松井真人、レピリエには加藤智宏というプロデューサーがおり、今後その存在の有無によって小劇場の明暗が分かれていくのではないだろうか。

洋楽 ▶ 早川 立大(音楽ジャーナリスト)

音楽・演奏会でもご多分に漏れず、この1年の最大の話題はコロナ禍だった。年初から始まった感染は急速に拡大し、演奏会は次々に中止・延期された。3～5月のまるまる3カ月間、演奏会はほぼ姿を消した。6月以降、少しずつ再開し始めたものの、主催者や演奏会場による厳重な感染予防対策、客席数制限が続いた。ようやく、名古屋フィルハーモニー交響楽団（以下「名フィル」）など一部が年末に客席制限措置を撤廃したが、感染予防をはじめとする開催経費の増大、チケット収入の減少など難問は山積。苦境の中で「音楽の灯を消すな」と関係者がこぞって必死に頑張っている。



ブラームスのピアノ五重奏曲を演奏する室内楽集団アンディアーモ
2月24日 電気文化会館 ザ・コンサートホール

[コロナ以前] 名古屋二期会のニューイヤーコンサート（三井住友海上 しらかわホール（以下「しらかわホール」）、1月11日）をはじめ、2月末までは、例年並みに演奏会が開催された。大物では愛知県芸術劇場等主催、藤原歌劇団によるヴェルディの名作『リゴレット』（愛知県芸術劇場大ホール、2月8日）。地元縁の深い笛田博昭（テノール）と伊藤貴之（バス）が重要な役で出演し、立派な歌唱を聞かせた。室内楽では、令和2年度の名古屋市芸術奨励賞を受賞したピアニスト桑野郁子を中心とする室内楽集団アンディアームの5年に及ぶブームス室内楽作品全曲演奏会が、第11回コンサートで完結した（電気文化会館 ザ・コンサートホール（以下「ザ・コンサートホール」）、2月24日）。またソプラノの加藤佳代子は17世紀バロック期のイタリアやイギリスの歌曲等を珍しい楽器リュートを伴って当時の歌唱法で美しく歌った（同、2月22日）。アンディアームと加藤は2019年度の名古屋音楽ペンクラブ賞に選ばれた。

[コロナ以後] コロナ禍の拡大する中、演奏会場の臨時閉館が相次ぎ、この地方で再開したのは宗次ホールのランチタイム名曲コンサート（6月3日）から。オーケストラでは、名フィルがしらかわシリーズ第35回演奏会をプログラム、指揮者ともに変更し、無観客で実施（しらかわホール、7月3日）、セントラル愛知交響楽団も「未来につなぐコンサート」で続き（刈谷市総合文化センター、8月9日）、以後、両楽団とも徐々に活動を復旧させた。その中で目立ったのが愛知室内オーケストラだ。常任指揮者を6年間務めた新田ユリの退任を前に、3回の定期演奏会を立て続けに開催（しらかわホール、10月8日、29日、11月28日）、毎回ベートーヴェンとデンマークの作曲家ゲーゼの交響曲を組み合わせた特異なプログラムで気を吐いた。ほかでは名フィルの首席奏者富久田治彦のフルート・リサイタル（7月16日）、ピアノの

桑野郁子、チェロの高木俊彰らの室内楽集団レーベインムジークによるフォーレ室内楽全曲演奏会第1回（11月1日）、名フィルのヴィオラ・セクションなどによる「VIOLASSIMO!」第5回（11月16日）、ロシアの作曲家グリカの歌曲をテーマとした愛知ロシア音楽研究会第11回演奏会（12月4日、いずれもザ・コンサートホール）が、それぞれに今後の活動に期待を抱かせる高水準の演奏だった。



新田ユリと愛知室内オーケストラ 11月28日 しらかわホール

[ベートーヴェン生誕250年] 記念の年はコロナ禍をまともに食らい、各種特別演奏会が中止や延期の大打撃を受けた。そうした中、名フィルは6月定期公演の「荘厳ミサ」を取り止めたものの、年末恒例の第九演奏会は東京から独唱者や小編成のプロの合唱団を招いて実現させた（愛知県芸術劇場コンサートホール、12月18、19日）。ドイツの大家ゲルハルト・オピッツを独奏者に迎えた新田ユリ指揮、愛知室内オーケストラのピアノ協奏曲全曲演奏会はファンに対するこの上ないプレゼントとなった（しらかわホール、12月26日）。

能楽 ▶ 飯塚 恵理人(椋山女学園大学 教授)

本稿では2020年の名古屋能楽堂での公演について紹介する。

1月26日「第六十四期 第一回名古屋宝生会定式能」の和久莊太郎《絵馬》と玉井博祐の《江口》では宝生流の素の型の良さが味わえた。宝生流の《絵馬》後シテは勇壮な男神。笛の鹿取希世が他の若い囃子方をリードした緊迫感ある囃子で、力強く颯爽とした神舞を和久は舞った。玉井の《江口》前シテはしっかりした口跡で曲の骨格を際立たせ、逆に後シテは序之舞がしとやかであった。間狂言の松田高義はベテランらしく落ち着いた中に位を保った謹厳さが秀逸だった。

この後2月から新型コロナウイルスの流行により公演の中止が続ぎ、8月2日、名古屋能楽堂で半年ぶりに能の上演となったのが、宝生流能楽師の衣斐愛が主催する「第五回 逢の会」での《橋弁慶》である。衣斐の前シテの語りは小柄な体軀から発するとは思えない威厳と弁慶らしい貴禄があった。後シテと子方・牛若丸の陶山琴葉は息が非常によく合っていて稽古の熱心さが窺えた好演であった。

「名古屋能楽堂九月定例公演」（9月6日）が、今年度初の名古屋能楽堂が主催する定例公演となった。《草薙》ではシテの衣斐正宜とツレの衣斐愛に熱田の神剣を守る神らしい品

格と威厳があり、謡に強さがあった。《素袍落》は鹿島俊裕の明るくちゃっかりしたシテ、おおらかで単純な佐藤融の主、あしらい上手で鷹揚な佐藤友彦の伯父の三人の息がぴったりあった和泉流山脇派らしい上品で楽しい舞台であった。能の二曲目はシテ熊谷真知子の《羽衣》。熊谷の「今はさながら天人も」以下は、天に帰れない悲しみを上品に表現した。一曲を通して囃子が良く、特に養成会出身の若手笛方の山村友子の成長が嬉しかった。

「御洒落名匠狂言会」（9月27日）の《武悪》は、主の佐藤友彦の貴



御洒落名匠狂言会
狂言「武悪」 9月27日 名古屋能楽堂

禄ある口跡が思案の上での武悪成敗であることを強く訴えた。鹿島俊裕の太郎冠者は情け深く武悪に逃亡を勧め、主命と友情の「中に立った」悩みも知的に表現した。今枝郁雄の武悪は情けなさの中に上品で控えめな台詞使いがあり「深みのある」喜劇になっていた。

「名古屋能楽堂十月定例公演」（10月24日）には伊藤裕貴の《熊坂》が出た。名古屋大学観世会出身の若手である伊藤をワキ飯富雅介が支え、伊藤も前シテの屈折した執心をうまく表現した。ハタラキもキレ良く迫力があり、日頃の修練の成果が十分に出了と思う。

「名古屋金春会」（11月1日）は金春穂高の《巴》。口跡よく動きもよくシオリはしっかりと美しい若手の規範になる好演だった。野村又三郎の《靉猿》は猿に含める宣命が上品な愛情表現で小唄もよく響いた。奥津健太郎の大名は位を守りつつ楽しげな大名であった。本田光洋の《阿漕》は前場の語りに深みがあり、カケリでは大鼓の河村総一郎と太鼓の加藤洋輝の掛け合いが良かった。

故・橋岡慈観師の七回忌追善である「淡交会別会」（11月3日）では久田勘吉郎の《清経》が若々しくて上品であり、ツレ関根祥丸と共に修練の成果が十分に出ていた。また久田

邦舞・邦楽 北島 徹也(CBCテレビ 論説委員)

古典芸能もリアルな場での鑑賞、コロナ禍の埒外に泰然としていることはできない。

「第22回 朱ざくら会」（1月5日 今池ガスホール）で新作長唄『令和に舞う』を花柳朱実が披露、西川えつも小唄ぶりを見せて令和の春を寿ぎ、恒例の「第42回 名古屋長唄大会」（2月9日 名古屋市芸術創造センター）も催されたが、2月中旬、愛知県内での感染が確認された。歌舞伎の振付でも活躍する高山市出身の谷口裕和が尾上右近と「第7回 谷口裕和の会」（2月16日 名古屋能楽堂）で長唄『吉原雀』『三社祭』でイキの良いところを見せたのがほとんど最後となり、愛知県は4月10日、県独自の緊急事態宣言を発令、花柳梅奈香「梅奈香会」（4月26日で予定）、西川長秀「長寿乃會」（5月30日で予定）はともに中止となってしまった。公演が催せないこともだが、弟子への接触も感染防止対策からは望ましくはないと、邦楽・邦舞の稽古場はほぼ休業状態となった。

こうしたなか、愛知県は「伎芸精髓 あいちのエスプリ」と題し、能、狂言、箏、舞踊、華道それぞれの映像作品をケーブルテレビとオンラインで配信した。箏は箏曲千景の会、舞踊は西川千雅とカークが出演し、箏は『六段の調べ』、舞踊は『連獅子』といった古典作品のほか、新たな挑戦としての作品をその制作過程を含めて映像化した。名古屋市もアーティストが制作した文化芸術の映像作品を募集（制作関係者1人につき10万円の助成金）する「ナゴヤ・アーティスト・エイド」を行った。

また、国の持続化給付金と歩を合わせて、愛知県文化芸術活動応援金（法人20万円、個人事業者10万円）を創設したほか、7月から2021年3月まで愛知県芸術劇場や日本特殊陶業市民会館（以下「市民会館」）、名古屋市公会堂の使用料の50%減免も打ち出した。

感染が一時減少傾向を見せ、定員に対して100%の客席使用が認められた秋、「瑞鳳澄依りサイトル コロナ禍の中で」



淡交会別会 能「隅田川」 11月3日 名古屋能楽堂

三津子の《隅田川》はしっかり張った謡と風雅な物狂いの舞が見どころ聴きどころであった。観世清和の《恋重荷》は流儀を支える宗家らしい規矩正しい名演であった。

「名古屋宝生会」（11月15日 名古屋能楽堂）は衣斐愛の《井筒》。名古屋市民芸術祭2020参加公演にふさわしく懐旧の情をたたえるシテ謡、典雅な序之舞を名手揃いの囃子が支えた。

（10月11日 北文化小劇場）が催され、コロナ終息を願った創作日本舞踊『願』を発表した。懊悩し静かな救済に静まっていく。舞は祈り、そのことを強く感じた。10月は「錦秋御園座歌舞伎」（10月3日～18日 御園座）も催され、尾上菊之助が地歌『鐘ヶ岬』を妖艶に、日替わりの子獅子 尾上右近・中村萬太郎と『連獅子』を勇壮に舞い、同じ『連獅子』を市川右近親子が舞った「伝統芸能 華の舞」（10月19日 市民会館）も催された。11月には稲舟妙寿が「稲舟派創立55周年記念小唄会」（11月1日 御園座）を催し、終日花やかな客席やロビーであった。また、今回は審査を伴わなかったが名古屋市民芸術祭に西川好弥は、好之介・将成を立方に、自身は近松の原文を朗読した「冥途の飛脚」（11月20日 名古屋能楽堂）で参加した。

柵屋三太郎の「柵三会」（10月4日 名古屋城本丸御殿）はじめ邦楽もいくつか会を催したが、社中のみ、あるいは少人数に制限、「柵三会」は唄をやめ三味線演奏のみにするなど、密にならないよう苦心していた。一方で「小唄大会」（4月14日で予定）、「邦楽大会」（11月23日で予定）はともに中止になった。



「柵三会」10月4日 名古屋城本丸御殿

「創作舞踊劇 名古屋城天守物語」(12月12日、13日名古屋市芸術創造センター)はまさに名古屋の邦楽演奏者・舞踊家の意地の舞台であった。五條園美が立ち上げた「芸能集団創の会」が、泉鏡花を想わせる、名古屋城の天守閣と櫓を擬人化した姫たち(工藤寿々弥、稲垣舞比、五條園千代、結月櫻、花柳磐優愛)の物語を妖しく美しく創り上げた。伊豫田静弘の脚本と演出、日本舞踊、演劇、現代舞踊、常磐津(常磐津綱男ほか)、長唄(杵屋三太郎、六春)、箏曲(野村祐子、峰山)と分野や流派を超えた舞台芸術家が集い、豪華な輝きに包まれた舞台、やはり名古屋は芸どころなのだ、このような世の中でも舞台を創り上げようとする意志、これこそが芸どころたる魂なのだ、そんなことを考えていたら舞台が涙で滲んで見えた。

こうして不安な年も暮れようとする12月12日、西川流総師 西川右近さんが81歳で急逝された。東大寺大仏殿での奉納舞踊で、藤間勘十郎ら若手舞踊家との『三番叟』の舞姿をオンラインで見たのが9月末、それが最後の舞台となったという。父 鯉三郎から受け継いだ「名古屋をどり」の広い交流から生み出された舞踊作品の数々は、オリジナ



「創作舞踊劇 名古屋城天守物語」12月12日、13日 名古屋市芸術創造センター

ルの舞踊劇というジャンルをさらに広げたが、その「名古屋をどり」も今年はコロナ禍で中止されてしまった。冥福をお祈り申し上げる。

美術 田中 由紀子(美術批評/ライター)

これまでも美術に限らず文化芸術は、私たちが生きていく上で、なくてもさほど困らないものと考えられがちではあったが、昨年は「不要不急」の代表格のように扱われた一年だった。4月7日に首都圏を中心とする7都道府県に向けた国の緊急事態宣言(16日に全国に拡大)と4月10日の愛知県独自の緊急事態宣言の発出に伴い、県内の美術館や博物館、図書館などが臨時休館し、ギャラリー等も営業自粛を余儀なくされた。おもな美術館では、愛知県美術館「大浮世絵展—歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演」(4月3日~5月31日)が4月5日に開幕3日で閉幕、「ジプリの大博覧会~ジプリパーク、開園まであと2年。~」(6月25日~9月6日)が延期、名古屋市美術館「みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ—線の魔術」展(4月25日~6月28日)が中止、「アートで旅するなつやすみ サマー・エスケープ」展と「『写真の都』物語—名古屋写真運動史:1911-1972—」展が延期(2021年に開催予定)となった。愛知県陶磁美術館「異才 辻晋堂



「久門剛史 らせんの練習」展(豊田市美術館 2020年)での展示風景 撮影:来田猛

の陶彫『陶芸であらざる』の造形から」展、豊田市美術館「久門剛史 らせんの練習」展は会期を変更し、緊急事態宣言の解除後に開催・再開されたが、関連イベントには中止となったものもあった。

こうした中、臨時休館後、改修工事を前倒して年内は休館していた名古屋市美術館では、代表的な所蔵品50点をインターネット上で鑑賞できる「Google Arts & Culture での所蔵品鑑賞」や、美術館と所蔵作品の紹介動画「世界のアートを体験—名古屋市美術館—」のYouTube 配信、「美術をたのしむプログラム」として配布していた所蔵品のぬり絵のデータ公開を行った。また豊田市美術館では、ほぼ毎日実施されていた作品ガイドボランティアによるギャラリーツアーの中止に伴い「オンライン鑑賞ガイド」をホームページ上に公開するなど、インターネットを活用した取り組みが試みられた。オンラインでの講演会やトークイベント、作品鑑賞ガイド、ワークショップは、2020年の新たな動向として国立博物館をはじめとする多くの館で取り組まれた。コロナ禍で中止となるイベントを補完する手段として有効ではあるが、画像や動画を見て満足し、作品を見たつもりになる人も少なくない。コロナ禍が収束したら会場に赴き、直に作品を見たいという動機づけにつながるようなインターネットの活用が望まれる。

移動や輸送を伴う大規模な展覧会が中止・延期となる中、比較的小規模の展覧会に見るべきものがあった。名古屋を拠点に活動した画家、水谷勇夫(1922-2005)による、大野一雄(1906-2010)の舞踏公演『蟲びらき』(1988年、スタジオ200・東京/1990年、七ツ寺共同スタジオ・名古屋)の舞台美術を再現した愛知県美術館「水谷勇夫と舞踏」展(4月3日~5日、6月25日~9月6日)は、小企画でありながら当時の水谷の精力的な制作姿勢が窺い知れた。名古屋造形大学副学長の伊藤豊嗣の企画で、名古屋エリアで活動す

るグラフィックデザイナー7名が競演する名古屋市民芸術祭主催事業「7 GRAPHIC DESIGNERS IN NAGOYA 2020」展（10月21日～26日、国際デザインセンター・デザインギャラリー）は、各々の個性が発揮されたデザインワークが見ごたえがあった。また豊田市美術館「久門剛史 らせんの練習」展（3月20日～4月10日、5月19日～9月22日）では、視点を変えて作品を見た時の発見によって、知覚が生まれ変わっていく感覚を覚えた。

コロナ禍が収束しないまま始まった2021年。展覧会の在り方や文化芸術の必要性が、あらためて問われる一年となるだろう。



「7 GRAPHIC DESIGNERS IN NAGOYA 2020」展での会場風景

文学 清水 良典(文芸評論家・愛知淑徳大学教授)

舞台芸術ほどではないが、文学関係もまた新型コロナの影響と無縁ではなかった。第33回を迎えた中部ペンクラブ賞は、選考委員会が対面の会議を避けてメールによる審議となり、六月に予定されていたゲストの講演会を含めた授賞式も中止となった。受賞したのは、セックスレスの若い男女の交際を描いた藤原伸久の「雲を掴む」である。愛情を互いに抱きながら「ふつう」の愛し方ができない二人の、葛藤と切なさがよく表現されていた。さまざまな性的マイノリティが社会に認知されつつある状況を反映したテーマだが、どぎつさを全く感じさせない爽やかな筆致で、ナイーブな感受性にみごとに共振していた。

名古屋市文化振興事業団が今年催した公募短編小説ウェブサイト発信事業「NAGOYAヴォイシーノベルズ・キャビネット」は、日常の活動を制約されて塞ぎがちな市民に元気や勇気、感動を与えるような短編小説を、270編を目標に届けようとする試みである。専用の応募フォームを通じて審査・採択された作品をウェブサイトに掲載するだけでなく、コロナ禍で活動の場を奪われた俳優に朗読の仕事を担当してもらう。文学と演劇の双方を支援する画期的な事業であり、現在も着々と進行中である。

昨年ここに記した作家の活躍が、今年も挙げられる。まず奥山景布子は、名作古典落語を小説化した『小説 真景累ヶ淵』を刊行した（二見書房）。一昨年奥山が『圓朝』で生涯を描いた三

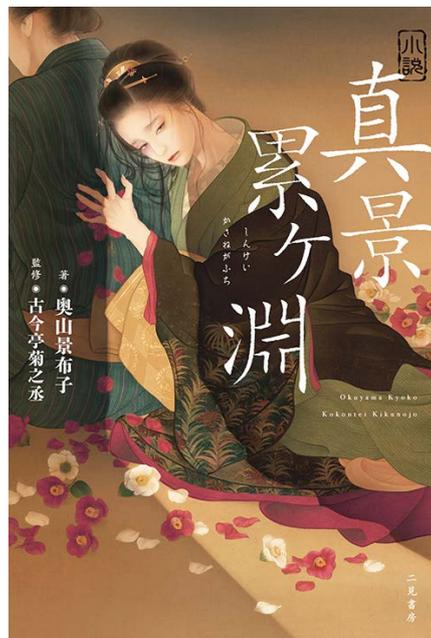
「NAGOYAヴォイシーノベルズ・キャビネット」

遊亭圓朝によって創作された怪談噺の名作である。複雑な人間関係が世代を超えて連鎖し、最後には敵討ちのモチーフになる長大な原作を、小説ならではの心理描写による再現力で読みやすく再構成している。巻末に、作家であり近現代文学研究者でもある大橋崇行が行き届いた解説を付けているのも参考になる。

また吉川トリコの文庫オリジナルの新作『夢で逢えたら』

（文春文庫）が刊行された。前作『女優の娘』ではポルノ女優として知られた母親を持つ女性が描かれていたが、この小説は芸能界同様、今も根強い男社会であるお笑い芸人とアナウンサーの世界を、愛知出身の女芸人と女子アナを中心に描いた作品である。女性の強いられる我慢、恥辱、苦痛、うっぷんを次々と暴いてこき下ろす威勢の良さと、どれだけ叫んでも喧嘩しても変わらない社会体質への絶望と寂しさが混じった味わいがある。

地元の出版物も2冊紹介しよう。平井利果の『岩田義道 その愛と死の記念塔』（風媒社）は、戦前の共産党中央委員として活動したが特高に拷問されて殺された一宮市出身の人物の生涯を丹念に追ったルポルタージュである。また門玲子の『玉まつり 深田久弥「日本百名山」と「津軽の野づら」と』（幻戯書房）は、若いころ交流のあった深田夫妻の回想から始まり、深田の埋もれた作品を再検討する、研究資料としても内容の濃いエッセイである。



奥山景布子「小説 真景累ヶ淵」

令和2年度 名古屋市芸術賞

令和2年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

いま い つとむ
今井 勉

伝統芸能【平家琵琶】



昭和37(1962)年、4歳の時に故司業横井みつゑ師に入門し、琴、三絃、胡弓を習う。昭和45(1970)年、12歳の時に故三品検校正保に師事し、平曲、琴、三絃を学ぶ。昭和60(1985)年、故土居崎検校正富に師事し、平曲、琴、三絃を学ぶ。昭和61(1986)年、一般財団法人国風音楽会より勾当の官を受け、平成4(1992)年には同会より検校の官を受けた。平成8(1996)年には同会会長に就任。平成11(1999)年には名古屋市芸術奨励賞を受賞した。平成12(2000)年にはNHK『芸能花舞台』に出演し、同年、フランス・パリ『平家物語の世界展』、

ドイツ・ケルン『平曲鑑賞会』に出演した。平成13(2001)年、大阪国立文楽劇場『邦楽鑑賞会』に、同年オーストラリア・メルボルン大学『国際語り物研究会世界大会』に出演。平成14(2002)年、平成16(2004)年と、国立劇場『邦楽鑑賞会<琵琶の会>』に出演した。令和2(2020)年、NHK教育テレビジョン(Eテレ)『こぼんの芸能』に出演。平家琵琶に於いて、現役唯一の正統な伝承者として全国各地で演奏し、NHKラジオ、テレビなどでも活躍を続け、当地域の芸術文化の振興に果たしてきたその功績は多大である。

芸術奨励賞

おち くみ こ
越智 久美子

舞踊【クラシックバレエ】



名古屋市出身。5歳で児童舞踊を、小学校入学と同時にクラシックバレエを始める。昭和49(1974)年、第31回全国舞踊コンクールにおいて、第1位「文部大臣奨励賞」を受賞。その後、越智実バレエ団(現・越智インターナショナルバレエ)に入団。昭和51(1976)年、パリ・オペラ座芸術監督セルジュ・リファール氏より日本人初の「アンナ・パブロワ賞」を受賞し、同年、第8回ヴァルナ国際バレエコンクール組織委員会より「特別賞」を受賞した。昭和52(1977)年には、第3回モスクワ国際バレエコンクール「第3位銅メダル」を受賞し、昭和63(1988)年、名古屋市文化振興事業団より「第4回芸術創造賞」を受賞した。

平成5(1993)年、「愛知県芸術文化選奨文化賞」を、また公益財団法人橋秋子記念財団より「第19回橋秋子賞優秀賞」を

受賞。平成9(1997)年、文化庁芸術祭参加公演『海賊』全幕に出演し、「優秀賞」を受賞した。平成11(1999)年、公益社団法人日本バレエ協会制定「服部智恵子賞」を受賞。

平成28(2016)年、越智インターナショナルバレエアカデミー代表に就任。平成31(2019)年、創立70周年記念『ロミオとジュリエット』全幕において演出、振付、主演をし、名古屋市民芸術祭特別賞を受賞。本年、「なごや子どものための巡回劇場テイクアウト」において『白鳥の湖』全幕の演出、振付、制作を手掛ける。越智インターナショナルバレエ、また名古屋シティバレエ団の全公演に主演し、公益社団法人日本バレエ協会の公演にも主演する等、幅広く活動しており、今後もさらなる活躍が期待される。

くわ の いく こ
桑野 郁子

音楽【ピアノ】



名古屋市立菊里高等学校音楽科を卒業後、平成9(1997)年、東京藝術大学音楽学部を卒業。平成11(1999)年にエコー・ノルマル音楽院(パリ/フランス)を修了し、平成14(2002)年、ベルリン音楽大学ピアノ科を最高位の成績で卒業。帰国後、平成16(2004)年より8回のソロリサイタル、室内楽、オーケストラとの共演など、演奏活動を開始し、平成24(2012)年、ソロリサイタルにおいて名古屋ペンクラブ賞を受賞。これを契機に平成25(2013)年より開始したラヴェル室内楽全曲演奏会では、NHK-BS「クラシック倶楽部」で公開収録、放映され、また平成26(2014)年には名古屋市民芸術祭特別賞を受賞した。平成27(2015)年から主宰した室内楽集団「アンディアーモ」が行ったブラームス室内楽全曲演奏会

では、全11回の活動に対して、2019年度名古屋音楽ペンクラブ賞を受賞した。

現在、名古屋音楽大学、金城学院大学、名古屋市立菊里高等学校音楽科において非常勤講師として後進の育成にあたり、室内楽集団「レーベインムジーク」を主宰する。室内楽の分野では、特定の作曲家の作品全曲を演奏するシリーズを通して、当地域の文化芸術の振興に貢献している。若手音楽家や、声楽、管楽器、弦楽器など各楽器奏者を交えたトークを開催し、詳細なパンフレットを作成するなど、音楽鑑賞が市民の日常に浸透していくことを目指した活動をしており、今後もさらなる活躍が期待される。

有限会社 風媒社 文芸【出版】



創業者である稲垣喜代志氏は、法政大学卒業後、学生社、日本読書新聞などに勤務した後に、昭和38(1963)年、名古屋市中区に風媒社を設立した。同年、第一号の出版、歌集『はるかなる陽ざし』(著・新堂広志)を刊行。昭和44(1969)年、出版社9社で「NRの会」(現・NR出版会)を設立。平成4(1992)年、きんさんぎんさん写真集『いまがしあわせ』を刊行し、翌年、『破られた沈黙—アジアの「従軍慰安婦」たち』(著・伊藤孝司)を刊行。また平成6(1994)年、『さくら道』(著・中村儀朋)が映画化(神山征二郎監督)された。平成12(2000)年、風媒社ブックレット・シリーズを創刊。平成15(2003)年、季刊誌『短歌ヴァーサス』を創刊(～2007、11号)。平成19(2007)年、

『東海 風の道文庫』シリーズを創刊。平成26(2014)年、「古地図で楽しむ」シリーズ第一弾『古地図で楽しむ なごや今昔』(編著・溝口常俊)を刊行。平成29(2017)年、創業者・稲垣喜代志逝去。東海地方の出版の開拓者として、84歳で亡くなるまで、多くの書籍を世に送り出した。翌年、遺稿集『その時より、野とともにあり』を刊行。

名古屋を代表する出版社として、社会科学書、ノンフィクション、文学を中心に出版活動を行い、近年は、名古屋という町の歴史を一般読者に認知してもらうための様々な取り組みを示す書籍にも力を入れて取り組んでいる。今後もさらなる活動が期待される。

名古屋市文化振興事業団 × ANET × 藤田麻衣子

文化でナゴヤを応援！ きみのあした♪ プロジェクト



新型コロナウイルスの影響について地元名古屋の文化芸術関係者にアンケート調査をしたところ、多くの活動の場が消失しており、アーティストはもちろん、舞台関係者も多大なダメージを受けているという声が寄せられました。このまま廃業を余儀なくされると、コロナ禍後に活動が再開できず、市民の皆様が文化芸術を自由に享受できないという事態に陥ることが危惧されました。

名古屋市文化振興事業団にできることは、多ジャンルの文化芸術関係者と協力し、新たな文化芸術作品を制作することです。この状況下だからこそ明るく、元気で、前向きになれる「応援ソング」や「動画作品」を制作することで創造活動の場をつくり、自粛を余儀なくされる市民の皆様へ、YouTube などでお届けすることで、文化芸術関係者の活動を支援することができないかと企画したのが、このプロジェクトです。



「応援ソング」は、名古屋市緑区出身のシンガーソングライター・藤田麻衣子さんに作詞・作曲をしていただきました。恋愛・応援ソングの楽曲制作に定評がある藤田さんは、当事業団が2004年に制作したミュージカル「ビッグ」の出演者です。この公演で初舞台を経験したことが原動力となり、シンガーソングライターの道を志すことになったとおっしゃっていただいています。楽曲タイトルはプロジェクト名と同名の「きみのあした」です。なお「きみのあした」のコーラスは、藤田さんの呼びかけで応募された皆さんの歌声です。



夏にお話をいただき始まった「きみのあした♪プロジェクト」ですが、次々と関わる人が増えていき、リリースになった後も、まだまだたくさんの方々に参加してくださっており、とてもうれしく思うとともに、わたしも楽しみです。ひとりでも多くの方がこの歌で笑顔になってくれることを願っています…。

藤田麻衣子

名古屋市緑区出身のシンガーソングライター。すべての楽曲で自らが作詞作曲を手掛けており、恋愛ソング・応援ソングがテレビCMをはじめとした多くのタイアップに起用されている。

BMK 応援大使に就任!

このプロジェクトをたくさんの人に知ってもらい、たくさんの人に元気をお届けしたい! そんなプロジェクトチームの想いを届けてくれる応援大使は、東海エリアを中心に全国に向けて活躍中の男性ユニットBOYS AND MEN (ボイメン) の弟分グループ【BMK】が務めます!



僕たちBMKは名古屋を中心に活動しているグループなので、このように名古屋に根付いたプロジェクトに参加させていただけることが、とてもうれしいです。名古屋から、そして全国に向けて元気を届けていくことができるよう頑張っていきたいと思います!

BMKプロフィール

名古屋発の男性ユニットBOYS AND MENの弟分グループである「BOYS AND MEN 研究生」として2014年より活動していたメンバー5名が、新グループ名【BMK (ビーエムケー)】として生まれ変わり、2021年1月にピクチャーエンタテインメントよりメジャーデビュー。嵐のように向かい風を受けるほど上昇し、逆境に負けず怪物級のグループを目指している。

中原聡太(グリーン)、米谷恭輔(パール)、三隅一輝(ピンク)、松岡拳紀介(レッド)、佐藤匠(イエロー)

第一弾「事業団 × 藤田麻衣子」

藤田麻衣子さんにもご出演いただき、名古屋に縁のある俳優・佐野勇斗さんを主人公に据えたミュージックビデオを制作しました。撮影は円頓寺商店街や名古屋市立向陽高等学校など、名古屋市内を中心に行いました。同プロジェクトの応援大使BMKのメンバーも出演していただきました。ウェブサイト無料でご覧いただけますので、ぜひ「きみのあした」で検索してください!

第二弾「事業団 × ANET」

愛知県を拠点に第一線で活躍する芸術家、文化芸術団体による民間の横断的な組織「愛知芸術文化協会 (ANET)」の皆さんとの協働で、「きみのあした」からインスピレーションを受けた作品を制作しました。西川千雅さん(日本舞踊西川流四世家元)、夜久ゆかりさん(現代舞踊家)、白樺八青さん(演劇)など、ANETが公募し選出した会員による6企画を映像化し、多くのアーティストや舞台関係者の皆さんに携わってもらいました。どれも素晴らしい作品で、無料でご覧いただけます!

01

企画者/西川千雅・夜久ゆかり 作品タイトル/ Tommorrow is Yours inspired by ANET
内容/ ANET に所属する日本舞踊、長唄、常磐津、箏曲、バレエ、コンテンポラリーダンス、書道、ミュージシャンなどがコラボレート。「事件」「苦悩」「歴史」「希望」…、それらの事象を狂言回しのクラウンが見つめる。

02

企画者/白樺八青 作品タイトル/ イキル チカラ
内容/ 世代を超えて「生きる希望を見出す」をテーマに、老人保健施設でリハビリに励む祖母と女子高生(孫)の交流を描く。

03

企画者/長谷川侑紀 作品タイトル/ THE FIRST STEP
内容/ コロナ禍によって今までの生活を侵された人々が再生し、大人も子どもも共に手を携え、明日に向かって新たな世界を築っていく決意を映像化。

04

企画者/佐乃健介 作品タイトル/ MUNEHARU
内容/ コロナ禍での芸術活動へのアンチテーゼから、文化芸能の復興を尾張藩主・徳川宗春に擬え表現。複数のサインージビジョンによるリモート合奏と西洋音楽と伝統芸能が共存する映像作品。

05

企画者/木佐貫あつひさ 作品タイトル/ 僕たち、私たちのあした
内容/ 「きみのあした」からインスパイアされたアナザーストーリーを、「リアル」×「バーチャル」×「笑顔」によって表現。モーションキャプチャー(二次元アニメーション)ともコラボレートしたダンス動画。

06

企画者/手嶋政夫 作品タイトル/ 儂げな嘘
内容/ 舞台へ挑む若者の姿、葛藤を描く。アクションとダンスを織り交ぜて表現するファンタジー色のあるパフォーマンスを映像化。



動画作品はすべて「YouTube きみのあしたチャンネル」で公開中!ぜひご覧ください!!

詳しくは「きみのあしたプロジェクト」で検索▶





なごやの文化を 褒められると、 うれしい。

名古屋市文化基金
Nagoya Culture Fund

わたしの寄附で、土を耕す。 わたしの寄付が、文化になる。

名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172

ご寄附のお問い合わせ
名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト内 **名古屋市文化基金**



頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz



PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響 / 映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

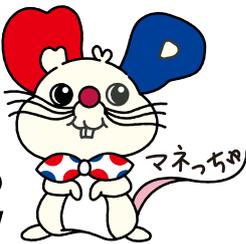
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル305
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM 等にて配布

E-mail: mane-pro@mane-pro.com